

## 奨励賞

### 小さな一歩から広がる平等

「人はみな平等である」これは小学校の授業や人権標語で、私が何度も耳にしてきた言葉です。けれども、現実の世界を見渡すと、その理想は必ずしも実現していません。ニュースでは、出身国や性別による差別が取り上げられます。街中や学校では、外見や能力のちがいによって、からかわれたり孤立したりする人がいます。そうした場面に出会うたびに、私は「なぜ人はちがいを受け入れられないのだろう」とすごく疑問を持ちます。そして同時に、私自身もまた人を傷つけないよう行動できる人間でありたいと強く思います。

差別は特別な場所や遠い国だけに存在するものだけではありません。私たちの日常生活にも潜んでいます。例えば、学校生活。運動会で活躍できるかどうかで友達の扱いが変わったり、持ち物や服装が他の人と少し違うだけで笑われたりすることもあります。そのとき、笑う側は「ちょっとした冗談」のつもりでも笑われた側にとっては深い傷となります。差別の種は、こうした小さな場面に潜んでいるのだと私は感じました。

実際に私の友人も過去に人を傷つけてしまった経験があります。軽い気持ちで「運動苦手だよね」と言ったとき、相手は笑って返してくれたそうです。しかし、その後日その子が「本当はすごく嫌だった」と別の友人に打ち明けていたことを知ったそうです。私はこの話を聞いて、差別は悪意のある人だけがするものではなく、自分の何気ない言葉や態度からも生まれてしまうのだと痛感しました。

反対に、差別を乗り越える力になるのも人の言葉や態度です。中学に進学したとき、同じクラスにあまり友達ができず、休み時間を一人で過ごしている子がいました。私はその姿を見て、どうしても気になりました。思い切って「一緒に話さない?」と声をかけると、その子は少し驚いたようにして笑ってくれました。最初はすごく緊張しましたが、その笑顔をみたとき、話しかけてよかったです。その後、その子は少しずつクラスになじんでいき、今では自然に過ごせるようになっています。私はこの経験から「差別や孤立に立ち向かうのは特別な事ではなく、小さな勇気なんだ」ということに気づくことができました。

世界をみても、差別は地球の大きな問題になっています。肌の色や宗教、障がいの有無などを理由に、不当な扱いを受けてしまう人たちがいます。戦争や紛争の原因の一つにも、差別や偏見があります。私達が住む社会の中で「平等」は決して当たり前なことではなく、多くの人が長い時間かけて守ろうとしてきた権利なのです。だからこそ、私達一人ひとりが「平等を守る」という意識を持たなければ、差別はなくならないと思います。

では、平等を守るために私達はどうすればよいのでしょうか。私は二つのことが大切だと考えます。一つ目は「ちがい」を恐れずに受け入れることです。人は一人ひとり異なる存在であり、個性や背景も様々です。その違いは偏見などを生むこともありますが、同時に新しい価値をもたらしてくれます。例えば、グループ活動の際に意見の食い違いからぶつかることがあります。しかし、異なる意見をまとめあげる過程で、よりよい答えが見つかることがあります。違いを否定し合うのではなく、尊重し合うことで社会はより豊かになるはずです。二つ目は差別を見て見ぬふりをしないことです。もし誰かが傷つけられているのを知つていながら黙ってしまえば、その場を「仕方ない」と認めてしまうことになります。たしかに注意するのは勇気がいりますが「それは違うよ」と小さく声をかけるだけでも意味があります。その行動がきっかけとなり、周囲も差別を認めない雰囲気が生まれます。大きな力はなくても、みんなの小さな勇気が集まれば差別のない社会に近づいていけるのだと思います。

平等とは、全員が同じになることではありません。背の高さも得意なことも性格も、それぞれ違つて当たり前です。大切なのは、その違いを理由に誰かが不利益を受けたり、傷つけられたりしないことです。「ちがいがあるからこそ、一人ひとりがかけがえのない存在である」その思いを社会全体で共有することが本当の平等につながるのだと思います。

私はこれから言葉や態度に気をつけ、「もし自分が言われたら」と考えるようになしたいです。そして、差別をみかけたら、小さな一歩でも行動したいです。その積み重ねが未来を変えると信じています。平等な社会をつくるのは特別な人ではなく、私達一人ひとりです。私はこの思いを胸に、これからも周囲の人と向き合っていきたいです。